話し合いで「読む技術」が上がる
―接続詞をめぐる学習者のディスカッションから見たピア・リーディング授業の効果―

石黒 圭（国立国語研究所 日本語教育研究領域 教授）

研究目的

課題の解答をめぐって参加者同士が議論するなかで、文脈の理解がどのように深まっていくのか。

調査の概要

コース・授業概要

［場　所］一橋大学国際教育センター
［目　的］学術的な読解力養成
［時　間］90分 x 15回
［テキスト］『日本語は「空気」が決める 社会言語学入門』
［受講者］留学生（N1相当） 22名

授業構成（3パート）

(1)自己との対話：自分がどのような読み方をしているか自覚

(2)他者との対話：他者の読み方を意識する →3～4名/グループ

(3)全体との対話：個々の読み方の相対性と多様性を学ぶ

分析対象

・「接続詞を入れる」（3回目の授業）1つの文章内に用意された①～⑧の空欄に接続詞を入れる課題

・全6グループのグループディスカッションの談話データ（石黒2018）

➡ Q：ピア・リーディングによる話し合いを通じて、どのように「読む技術」が上がるのか？

ディスカッション1：接続詞か？

【 ④ 】、書き言葉の場合、目のまえに話し手がいませんので、丁寧体と普通体のスタイルの切り替えは起こらないように思っている人もいるかもしれません。【 ⑤ 】、学校教育では丁寧形と普通形の交ぜ書きは避けるように指導されます。【 ⑥ 】、学校教育の総まとめのような性格を持つ大学入試センター試験において、交ぜ書きがおこなわれているのです。

（原文⑤「事実」。なお、④「一方」、⑥「ところが」であった。）

A　5番目は「さらに」にしました。（Aが自身の解答を提示）
I　私は「普通」って書いたんだけど。（Iが自身の解答を提示）
L　私は「実際に」一番入れたかった。（Lが自身の解答を提示）
A　じゃ、「実際」？（Aによるまとめ）
L　あれは接続詞かどうかよく分からないけど。（Lが接続詞かどうかの疑問の提起）
A　まあ、合ってると思うよ。（AがLの解答を肯定）
A　じゃ、「実際に」にしましょう。（Aによるまとめ）

1．接続詞を意識して理解する

・日本語学習者は、接続詞の読み取りに苦労し、文脈の助けになるどころか、かえって妨げになっている（ポクロフスカ 2013, 井伊 2019予定）

＜ディスカッション1の結果＞

■ 接続詞＝文頭に存在して、前後の文脈をつなぐ働きをする「つなぎ言葉」

→接続詞が意識できるようになることで、先行文脈との関係で後続文脈にどのような内容が来るか、ある程度予想がつく

→文章を速くかつ正確に読めるようになる。

ディスカッション2：どのような連接類型か？

日本語の場合、原則として丁寧体か普通体か、いずれかのスタイルを選ばなければなりません。【 ③ 】、こうした文体の切り替え（style shifting）の研究が盛んで、このテーマだけを扱った本もあるほどです。

「ですから」「なので」「にもかかわらず」という三者三様の答え(原文③「そこで」)。
参加者のあいだで「考え方全然違う」というぼやきが漏れたあとで・・・

H　「だから」「ですから」と「なので」、まあ、因果関係って言う感じ。（Hがばらばらな解答を整理）
Q　えっ、これなんで、3番って前の文章と違う話じゃないですか。一つを選ばなければならないのに、それを、えっ？（Qが多数派に反論）
H　いやいや、一つを選ばなければならないので。でいま、そういう文体を切り替える研究が多い。（Hが逆接ではなく順接であることを強調）
M　そうそう。（Mが同調）
H　ならないのに、だから、のに、研究がすくないでしょう。なんか、そういう選ぶ機会がチャンスが、なんか日本語中でいっぱいあるのに。（Hが逆接なら後続文脈は逆の意味になることを主張）
Q　ああ、わかりました。（QがHのロジックに納得）

2．連接類型を用いて文脈を整理する

＜ディスカッション2の結果＞

■ 連接類型（市川1978）の議論で、前後の文脈の理解が深まる。

・浅い読み → 感覚的な接続詞の使用
「～なばならない」というネガティブな評価と、
「～の研究が盛んで」というポジティブな評価の食い違い。

・Hは筆者の伝えたい論理をQに伝え、Qは文脈の理解が深まり、教えたHも論理の重要性を再確認 。

「異なる接続詞であっても、似た役割を果たす」ことを理解

→接続詞を用いた文章の理解や表現はより容易に

ディスカッション3：どのように解釈するか？

丁寧体を選ぶか、普通体を選ぶかという問題は、そんなに簡単なことではありません。（中略）さまざまな要因があるからです。

【 ① 】、丁寧体は話している途中で普通体に変わったり、普通体で話している途中で丁寧体に変わったりします。【 ② 】、話している相手が普通体で親しく話しかけてくれたり、話している途中で相手との距離が縮まってきたと感じたりしたことで、丁寧体から普通体に切り替えた経験のある人は少なくないでしょう。

①各学習者は、F「要するに」、B「そのため」、D「しかし」を選択（原文①「しかも」、②「たとえば」）。

F　「しかし」は、ええと、何で「しかし」じゃないと思うかというと、その前の文の「しかし」が入るとその前の文とは真逆しないといけないんですけど、ここでは、前の文とその次の文に対立関係はなく、
B　似たような、話が
F　うん、もうちょっと深める感じ、前の文をもうすこし深める感じが、次の文なんで、対立の「しかし」ではないかなと<笑い>。「そのため」が合っていると。（Fが「しかし」を排除した根拠を説明）

①と②の関係について

S　じゃ、①、②と一緒に入れるんですか。①と②、一緒に、何かなるか、関係があるでしょう。同じ段落にありますから（Sが①と②をセットで考えることを提案）

3．接続詞を軸に解釈を議論する

＜ディスカッション3の結果＞

■ 接続詞を軸に、互いの読み方の違いと根拠を提示

■ 当該文脈のなかでそれぞれの読み方を比較検討するなかで、ピア・リーディングならではの読みの深まりが生まれている(舘岡2005)

なぜその接続詞を選択したか、その理由を説明

→互いの読み方を可視化、ピア・リーディングならではの読みの深まり

4．接続詞を組み合わせで把握する

■ 接続詞を空欄ごとに決めず、組み合わせを考慮

→文脈がよりグローバルかつ安定的に捉えられるように

5．全体のバランスを吟味

■ 全体と部分を何度も往還しながら、接続詞を選択

①たとえば、②たとえば ??
→③だから、④しかし
⑤たとえば ?　→①②再検討　→①②⑤保留
→⑥しかし、⑧一方　→⑦たとえば　→①たとえば、②だから／また

→ディスカッションをつうじて、文章全体の構成が参加者の頭に入っていく

6．まとめ

ピア・リーディングでの話し合いを通じて・・・

1）接続詞を用いて文連続を理解する姿勢が生まれる
2）連接類型に基づいて前後の文脈の整理が可能に
3）互いの解釈を可視化し、読みの深まりが生まれる
4）文脈をより大きな目で流れとして捉えられるように
5）文章全体の構成が適切に把握できるように

【参考文献】
井伊菜穂子（2019予定）「第9章 接続詞による文脈理解の方法」『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究』ひつじ書房
石黒圭編（2018）『どうすれば協働学習がうまくいくか―失敗から学ぶピア・リーディング授業の科学』ココ出版
市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版
舘岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ－日本語学習者の読解過程と対話的協働学習－』東海大学出版会
ポクロフスカ・オーリガ（2013）「接続表現が表す論理関係の中級学習者の捉え方―ウクライナ人大学生の文章理解を例に」『日本言語文化研究会論集』9、pp.19-35

本発表は国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」（プロジェクトリーダー：石黒圭）の研究成果の一部である。